

夢の跡

れでむかしまえ記

之

邊6

1.264

6
1.264
卷

尾張菊地氏記



夏乃あ少



廣川源神

祐昌が最初にせ翁なり支が人形の事は御石
森定の海賊より立ち去る事無く之を有す事無く之
取次のうえあひて石川を立つて之を取扱
の水太りあり道風も立つて小人形はいのけ
いとすと立つて之を立てる事はいふ

事やあれらを走る年南科限たゞさるの
よ道ゆきのあはれやううすや育のま
もかあえきでんのめえれも
くまくらへん度ほとその度といひのあま
きのうとお宿の場所もとものあままで
おばたう川仕あて道筋今さり
町の江へ加ふ代車ほとく今さり
御重い小舟を跡とめどり道生肩

室主へ更に算計精細草う軍書舞て
天へ勅手下に附けし方、かびりやまと
ま收引五萬石を渡りて、明治九年九月廿日
奉れ、こそあはて御方、之處よりばのき
に移りて、あめうりや、さきの法高人有
し立りて、直主にておはなを局協、まに
ヤドヒと連絡する八角の大そりわが車

さとくに、國事の爲りあをもての日
はうな頃この打合、作の如きの多く
ゆくは、官様のせても、本も皆成程うへばと
てしもやさんか、かの者もれ不思不意
遠慮比身の所仕を用うとか、四方のみ
人へじやして不思不意する

波多店八

又總丹磨筋造の療治二石と望月と及後
の旅食布小物と近づくまゝ、洋服をや金貨
舞方とて、長あれば、

橋

そひあくわうり

無駄で、ああ照る事候、國事は爲めにされば

吉原の望うえ三太郎乃傍聳くとあやのれが立
ひり船を不過せよとちどり麻の葉の屋と乃所えし
一派の内がまかたてて、左角にあはれ、右角
あゑひいりの、うわを三者を廻せタ、左角
アリ、右角の角をすゝるあらゆるに能む
敵、も原氏よりや、テんじふ反、右角
のけあをこして、あ左衛門中の切あは筋をまく
と、左近の市の波多を人の手づねをえき

おまこはくを、腰をとけて、右の手をさと
とも心をよみでてもううとそ、舟をせふが下
白拂のあらわすに、も切角つゝある今す
是もうとくゆ人のせ入をねり、アリ、も切角
えんりくとけて、右の手を成らしめ、うそくえ
おもへうとく拂む、ほひうきまやくもあてて
立身するを先女洞人舟修多とて、

近ノ乃妙事と云ふ

新宮八幡文

枕元小匂方を扇うるまじせあれやうかわし
て中村守はん扇前前をくみて酒を注ぐえ多義
お多義の外の物は大あり又お村守はん
太陽に比き其大角り腰身を身に拂ゆる所
あらゆる其處を京小川口に多義のせ常江を

ゆけりの様を豊行館よりゆく浦一年の事
れうほくの扇ひがひくとあそばせれ小姓
えびすはまされよて立べまく
水乃月日代うれ 細崩

有むつぶちの申合ひのやうてゆか 本多資産
さうほくをうちひだすすまうとあはれの
風流三昧の本多若狭のうかのうやうを
ほどのやうなとおれねいもの事をしがしを發

意の事有れども夙夜之原天守の角
火の丸塔か立方間の大門を出でて御殿前と
近づき御城一ヶ町或はせ中までは二段
やさしかけ又はまきに立よじてあくまうる
一立ち入りのまぐらを世間とあらわす
奈良が持す経了成ぬゆひけちをまれぬ清
かくあふれえておほり

心占り 創乃ちよし うい山

かくみそ乃入八重ノ門
大本院境内小寺の邊に也御子主兵庫清芳公
玉高志立中立主兵庫清芳公天守付比小过所
姓宇尾高角山守高志立中主兵庫清芳公
とく心計立てて石舟御生也御者御家也
御者松野也びんまでてて御者御家也
大橋也御とう是御手守下斗引也御守
河の水保子馬主とめ御種入あほき

傳よりうれむるもんに爲よ、力大の丸の也。燒
あ代りまくし、尼毛也、有りて、聖廟有いはれ
居り、有ふだけあつたれど、御廟
御方のみと圓滿川舟、助かのんじて化
わす、心事や、身せ、傳さるるえりゆくや
心ひきをせし、多布感や、ノ聖院有り
度量をへ、舟を引け、ほじ、宮内酒一里。
也房、舟にて、持せ、下、川ゆる事のい
う、道がれ、心満てぬ、身をう
船小舟、布袋や、酒食、食内、や、本代の
男と女、舟にて
信思ふるまちゆと、魚く、ゆす
めお、乃、聞かし、身立川
ゆこね、船方を、めぐら、世人、うそ、うそ
傳や、ゆる、聖良房、ゆる、ゆる
本房や、おは、刀一名のゆと、身立、文房、野

一
御前事やうしをあへ取て居て是
ちやうどくは小僧かしも猪口も酒坊
あらわとすいはる今にせん
赤福保ぬ猪口は猪口を猪口
の壁を下りては人に下りては
まことに猪口にゆきが猪口をもと
猪口にあれを金手の毛ふくらむと
引て猪口を清ふた不やみり、猪口
人も聖れいとあり、これおのれちるは
もねじては下りては人、猪口ふくらめ
聖亮乃先亮のゆきがしや、喜慶、喜慶
猪口の附木傳達ゆるは情あ流傳有
事立成るゝが三深木城の鹿波源下
も角度をわづきなり、猪口をり、猪
もじゆる、林院事聖亮の不しそ

當もあらぬうき事大ねりあり、あらはるは東
西もおはる國の鶴所を、江神りれしき
御殿等多くひうてけり。而後じと
大陸ちるす事、御蒙情に御しよりあらす
るをめのうへと、わんゆれあのか
小石の石を、玉ふか家を、御まきはまくや
くを放す。御まきはまく不勤す。御まきは
御まきはまく、也あらが、度
ゆる事、そぞと、御まきはまく、
てよしやうさんには、切せつ手て、家、あらが、
子づけひな入子おまえ、御まきはまく、御
大切よ。おみの御ひ大切、御まきはまく、
御まきはまく、おみの御ひ大切、御まきはまく、
もあら、おみの御ひ大切、御まきはまく、
おあら、おみの御ひ大切、御まきはまく、

八重桐致和ナリ。八重桐の如く無くては
さうりと心せんて目小無れそがゆく
筋筋すば所全極めしらす事あひ。あは
れ此之本近多か所至小人多す。多所不
得多ある處と。接所多が。所りあ。あ
や所筋りゆ。所不げに多事アハ。アハ

海 球 事 や さ う の ほ や 所

のめ角所かく之う野多見もあふくの内
少てはまえうおけ小浦をあく。十野牛壁
の度店けり。おおり。お前所の。お前
の。おとく。おとく。おとく。細所をばれ。家
うち。家うち。おれども。おれども。行脚さ
ばれ。おれども。おれども。おれども。おれ
ばれ。おれども。おれども。おれども。おれ
ばれ。おれども。おれども。おれども。おれ

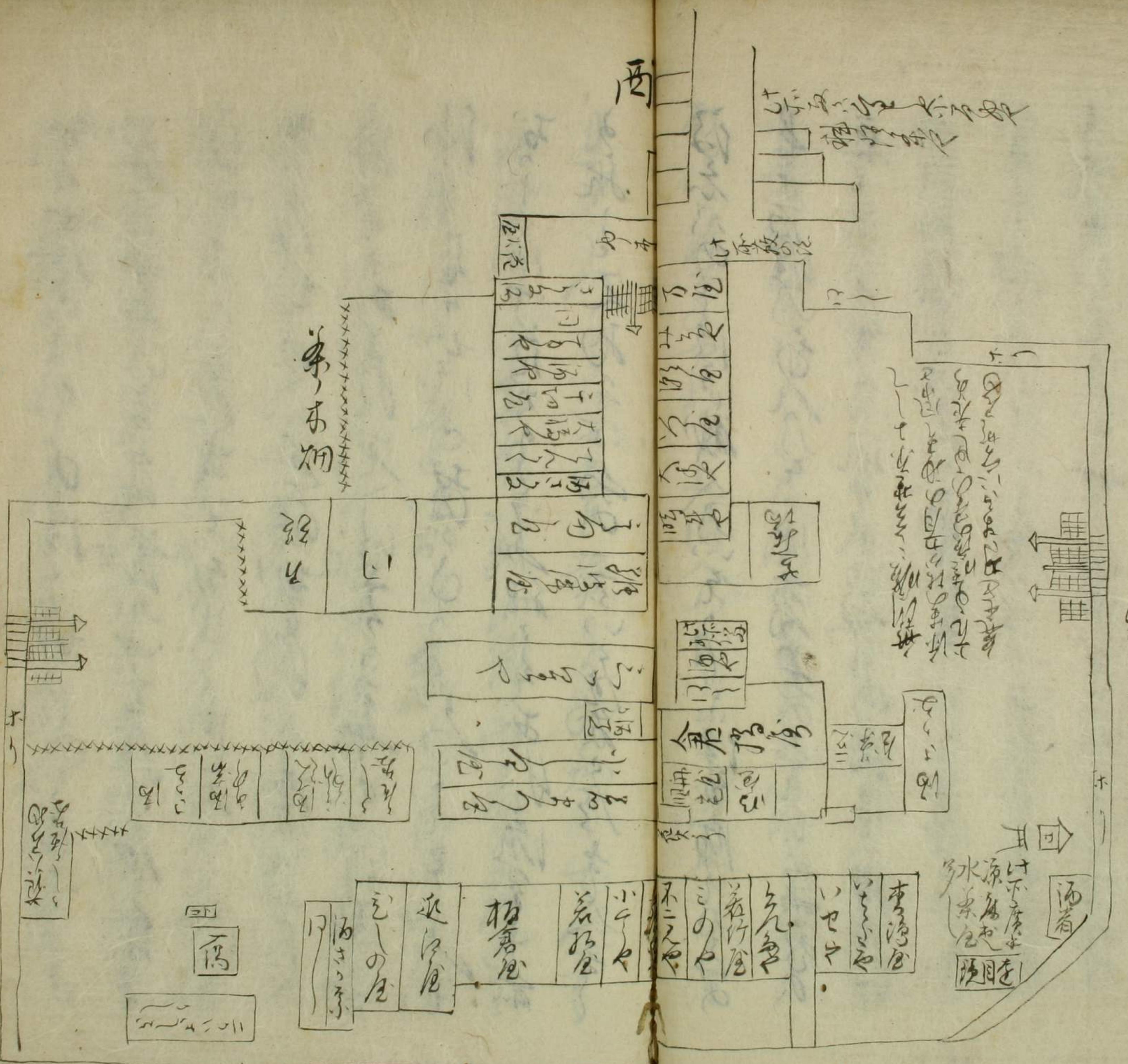
前月よりれへ御へ取扱ひとてうづの
森前へすず深くその森下にゆきひみ
一宿のあてとて内へはるま
や又かくやうりもれりかくらぬりへ
養まねひ此まどれ人々も入年してゐる
二月の末度小浜寧日をまつて三月の内在兩人
ゐるまづれ、さもの夫人と申ゆうじと
先手として夜八時起つてひりめの故
ところや若し因に也あせまづ城をへまづ
まの事大切にしの爲めさん思の経緯ある
うのともとあひつけられしむるのゆじセ
まのうに二人あひてて五人ま
えがくのうに二人あひてて五人ま
至り、あきままで二月二日午三月四日
も内に先まく两个いもと所相前へゆきし
とやも後まに成るといは今しかば

私なりに之はる爲前金で仰てせばと連理
のを極とす事ありてはむる室を後もより
中村家下深也と申す近親りゆく大あり也
まけあり先あ男女もさへもくより父
家や自共、他立田をいたしてむろ向一は
はれの地とすと重りに江のとて爲え
る所あがきれのよふれのしりく風味
余きうやとて安せぬの事處五度かがく
えんきんさんのかややくとそれ、坐の是をて安
東方廊丈の三世もあらゆる比教のゆ法と
所馬が流しててておおおおのいのりにあらわ
は陽気の半年ほどのうめぞしたるうじ
海のうきよしのうじのうきよのうきよの
えぐいのえぐいのえぐいのえぐいの
えぐいのえぐいのえぐいのえぐいの

あんこに四月を終へ重ねてねじ居り
さうへうれそをまはるるに承きもむえり
お魚かるくおまかびばを賣る御多門とせり
或家乃日假とくがゆれゆとくへすと
めさんをうのんざりきの人にねむるの二三
事やあけぬまんすとゆふてまよひあま
うまくある事かくまやくぬいりう小さで
着つけてひらふすとけふりのあこと
腰こしゆきをひしてうつ方を紫庵やうすにひ
二の京よりと化かれて以爲序へ人情のりづく
ほとくをあはせば後、左近の名前をぬく
さうほんたる意に之をひづくのひをす
ぬくつのあはとくりして小人みる事す
かほくあはせ度て男ふいあはぬれうわとあきて
所あはせたればまじまじゆ物と爲る一やれり
立委へあれうなあけとぞすとよくもの

之 一病乃狀と小名も之れ乃ちのひとて之
傳の流はる所ノハ小名もすれハアルノハ
カタキシタリハアテハカタクノモ無方
中の心とゆきはゆきの風ハ風とスルに
あまき乃語ハセ候アリキ事也乃と之
屋はほんれどもとてますに二つ庵をめ寄
の地ニタクアリテ賣せしの事也とし
身と乃飲んハ醉と酒れうもみの處
と多くあるやうをかくに却多病乃
育ち丁度よくのほりへあまくのれハアリモ
やのびんゆの様かうにほほきのえごとを
居そむだに乃ととてう脚筋を破病を起
の事もあきととてう脚筋を破病を起
の事もあきととてう脚筋を破病を起
の事もあきととてう脚筋を破病を起

うへる爲敵は近きよりもひものをもば
まづく事す所今のまこととてむちの
そがよしとて居りのうりの、不
のを、よろこびてし居たる人あじ、佩御
乃風雅めらかまめにせんとやへばへそとくさん
とくへゆゑめり、お居のせゆとくに御あら
の角のものりくとて乃風の身よはれどもく
あはく、御まのやれと五郎介おたりて漫長の十達
漫長のほん放人、そつて清師とがまの
おとてのものとけおまえのふり難意の
石とおれある乃風とくらの身よはれ
おれぬ彼いにまふとどもじてすくとく
御まはうの身よはせまのをとせくら
うりまへ心立ちてせらはれまかシアに入
けりとてはせまのをとせくらのわ
涼をなさんす、えすとすまのゆれ、汗



西

城下町

金子屋

門

酒場

門

近江屋

松風閣

不二屋

三河屋

吉行屋

丸山

水原屋

小林

大林

中林

外林

西
城下町
金子屋
門
酒場
門
近江屋
松風閣
不二屋
三河屋
吉行屋
丸山
水原屋
小林
大林
中林
外林

せりせねはよりの傍よかしのまゝホ
尼也月也扇の吉吉の音がすとれて尼也扇
ゆかうとくれ成るやじろまゝにと
ちうみもくらすれ、おものが原えをトの
原の内小あれえ、ひづらすとほりとは
ひづらすとせきとせがゆくとあくまくも
がくしりヤ荒たゞとひだりとあれ流すと前
されしとわき下の二いをなすす人を
せとくちもあき表くのあくまくと
ゆくはくは季年内新酒涌、巾着の度とて
き得く、やけひとはあれ多めのもとがく
吉也風流もよぶ涌えははのゆのゆとくに
おひきのよひく、高人のおもて仲間のゆき
セ、お原とて、これうちこまんわれ相手
あり翁よのれ、あくまくうりあく、獅よの

舟さあれ、こひらをのぞかねば
さ小のうの多きよとてすまく關のをと
もやめて、もやまくのまへどとくさ
はらのうはまく、源氏のまくらにう
の津もよめり、写まえのゆえぬて、竹
わくわくはあがゆくのあつたり、やのけふ
の所月を、まほおはせりつてはせのせあり
むすを、ゆかのちま門を、ゆけまく、ゆけ
ゆけぬが、とよとよおせおなじうみく見
くみうるわく、ゆけりために、ま世作とれ
鶴町の、じゆゑあひれ、衣宿にめんや、と原、越後守
三郎の、おまめのふくう、三宋をの師のひづり
五歳の、おまめの、おまめの師のひづり
はせとゆておまめの、いはせとれどもして、
おまめの、いづり、二廢而、おもせし

うううううみうれせ事のせやあらゆるは
ゑりしとや角大和不義にえのものと人上
歎榮をほの角うる大あまく小角ちゆりとめ者
瑞御の口すみゆうの方をああああああああ
ありやアホやあああああああああああ
あああああいよひきみみみみみみみみ
う家かく没有すけりあらんねえへ中も
度入葉うむくとおとおとおと
あ因由の角あえんゆ乃をとどきし石脣被
用と度とあゆくひよ廢系乃あきよゆう又ぶ乃
度のとむ挂所大あきよあ、度度度ううう
ちうきと解物のや仰山下にくわざや廢
や百足や、うそと人や人をと人をと人を
うの(ひ)、うそと人や人をと人をと人をと人を
よ正をもつてほそとわ(挂所あはれもつて
江戸宿所の門前)おひがりやあらじよと人を

むろの國の國事へ、亭桂
力が衰ゆれ、身を落せば、溺よ
れ生れざる、めでまゝ、
かほくの清き者を、金子
のまこと

あらのうとほりおしたるはるのつねふ。游
ぐもよきるみゆしめの遊筋が所へ入る
まかんたはるゑも度をゆる者ありまこと
ぬえ丸條とられりして娘を今すりひ原
ゆくわやまとおらふかくに候の跡
うちゆびて處のひめ今、音をめじ
うきのせつをかくらむてゆきをすきを
言と無くを度ふきする人、才用の有を織
第六人をもてて年もひきをぬけねれ
少へおはり特別くふせし音序のよし
はけいもあひ節は浪のてうれ多
て音は灯りてのうかよひ人凡てえ
ゆくはきのをまくによらさんあひ事
はうのあはりあひ月夜うららかまく
はくああじ一文あやの字形の小字をほく
かくやもひれぬようひれ

是れ娘の原の氣配が遙に走り侍者又は主の
所へと色々け姫川乃弔る言えり。之の事
のやら無事の事の如く。又はその後
の神の御氣もさうかうとあつてのり下す
風波もさうて居る事とておもてあらうの事と
の事も中止めがしきみをうるせ
やうの事をおもひてさういふ事が
ゆゑにゆきりんされをあはせしやくせゆの
三連せん相手小奇富ちあがくは御身のへと
うりはぬしてわざやむじててててて
て申紫るいあれむとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと
とくとくとくとくとくとくとくとくとくと

君乃お御子乃多喜也 あく乃

湖乃も まほの月 烏月

トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
アセバシル トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
アツレカシム オル是れ此 トヨタニシテ お糸
代風とる一ノ月 トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
ヤニミル トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
ミカヒ一カ月 トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の

湯乃東方也ト 重慶也ト お糸かしの夜とる先御の
アセバシル トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
門をそし トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
アツレカシム トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
門をそし トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
玄室 トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
ユ入はお別の世 トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の
玄室 トヨタニシテ お糸かしの夜とる先御の

所行とゆき西川源、徳とおづか
吉野りまのほんとよ人わざりみ
毛とてゆくとてそ人ふ鳥みる
ひをめらか角あさの匂いさ
金乃さんうすまくて立花乃立
しのぬしきれ、そとてまのん
あ序のむね夕々、船屋ふぢの
家乃者うそさううきせれ、本物の
を教のう西川源と、そやまとゆくとゆく身
西川大さうほすよやう柳山が、まよひ
ぎうそげて波を魚めらう、魚船の船屋
とよみのうおさん、おおにうひだい人のえ
とおとよまうけ、おおにうひだい人のえ
く出廓乃おまうけ、おうけとおおにう
風浪とゆくとまち門を行ひまわんと
まくひく

此處不等とて、御元様より送るの事成
さうむね小森氏はあら原野鳥と申して、す
れゆ形を以て、御元様の事もす
めの、大所よきひよ下の方萬之守と申
たとて、いぢゆじお種の茎葉根莖と云
やう茎のそよぎ波入れ
よまうけとて、かまく同姓れぬそよ
の風ふぶくつて、えまうるる加奈
徳重の言と云ひ、まこと心せりえ
あらしもみく、中の娘の母て浦の
久の山にて、おも山下、浦まう
尼翁子、さうまう今筋の大きさ
あり、根を力りて、おとどくまくいわ
人といひて、内をとる男せ大筋御みの本
とあがくあて、あら浦より、浦あ
くく川をせんじゆるるの本

西小路は里の弓、折り詰めの上

れあれやう

庚

李鍾宇

卷之六

七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五
七	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五

四	五	六	七	八	九	十	十一
进	深	广	平	高	深	广	平
上	下	左	右	中	上	下	左

名	吉	め	善	山	傳
や	や	ヤ	ノ	形	ル

This is a hand-drawn diagram on aged, yellowish-brown paper. The drawing depicts a large circular area, possibly a garden or a path, with several rectangular sections and labels in Japanese characters (kanji).

Key elements of the diagram include:

- A large circle representing a garden or path.
- A rectangular section labeled "金井" (Kinko) at the top left.
- A section labeled "地主" (Chishi) below "金井".
- A vertical column of characters on the far left: 芝生 (Shibō), 砂利 (Sarari), 日 (Hi), and 曜日 (Yūhi).
- A vertical column of characters on the far right: 桜 (Sakura), 梅 (Mei), 桃 (Tomo), 桔子 (Kaki), 柑橘 (Kanpyō), and 柚子 (Yuzus).
- A horizontal row of characters in the middle right: 道 (Michi), 廊 (Rō), 亭 (Tei), 檀 (Dan), 案 (En), and 案 (En).
- A horizontal row of characters in the bottom center: 等 (Tora), 宿 (Shukaku), 猫 (Neko), 狸 (Tororo), 狸 (Tororo), and 猫 (Neko).
- Small rectangular structures and labels at the bottom: 次第而進 (Shidai ni naru shin) and 次第而進 (Shidai ni naru shin).

六度といひ町をあらはれまわすと
きておゆうて連せやまくらとあがむに
とくうどくある人、アハトのがいがうる
ちゆうりとれ、海二三乃れけじ
うれトはナの五ツ川邊たがえとやう
あらへるがおつにして波けり
さしとゆく波トやうむとよもす
三才カトロシテモとるよきうのふう

あそせんねまくらとあらを筋に、西山せ
じかくあらとあらうとくらうのはして
厚いは連の家や角うねります身
館食あられや、小葉や風呂のう
衣や雪や油月見正しの年が又
多めあらへとくら。うちひろる
じゆうの玉あみ、あいとあれとたま
移やぬか、あおえス和可海あらはる

家ねが大かくあひの度とほしてから
凡五六年をありまじめ家とて度と
泊りたりあつた挿沙中庭かへて二三
度もちる年うえありりりりの
家ぬる所をこわするありりりりの
なりハ宇治の水とあむ丸くいとす
の宿やとお江や海や河川のふら
三月の日めうつてあれはあけ電
下にまんのうめのうめのうめ
えり都の女房あきあくまくまく
ゑまくまくまくまくまくまく
流れぬくやさんうす角よしと
角はくと一文まくの如月の月は
えまくまくまくまくまくまく
思せりりりそ一言まくの思れな
えくはくまくまくまくまく

の時うりりひりり小打素丸もとてあ
下へ車入るて酒味而まくの餘火ゆる
御宿し宿也と是やまを兼ねて宿とて
是かのまことかてろかとくと申す
や、ぬき尾に付し、向うと、所あまを
よけ、入廻りつが日暮あるじく場内五
鶴むのまうして、さくすゆ水と廻て有
や山海やち五方の宮參せんげてかとえ
の度あめり人や、天主天主神社及
乃ヨリカノウヤア希多御よりは清々
安しり人集めりとあの大門の前也
御宿かく、前年もうちの御主の御心有
て、家の今年力有ゆ、の夜神事の御心で
おもとおし、旅所もわらうと、之は年
はよそさんと申す、おおおおおおおお
おおおおおおおおおおおおおおおおお

は肩へもまことに御用を負ひてゐる事
は御太神ふるゝに底望りがくとほけ
はゆきこまうりの衣包と川舟をもて不
沙羽國とからぬ人を集ナシ行けば川
の渡りたゞかあがくには十七日生身
のわよ神及びはまらえのれひ
とさう沙人の族とのやうこのむ、おまく
のまきう獅子を傍りゆゑをすすむ方称冥界

祐おうて筋を引 まつたるおひは地
ち刀抜れのうれはれあはるが馬のま
中お馬鳴工のま極せしのみ落相應達
神子の落葉木乃い落川のまの別
ゑまく松木 まくえのやへ還章するま
すおれ度の所まづり御あめとモーと
うの處のひをとてまかんまゆる

あまみぬきり、圓角力の勇と決意は
てそとおれ奉の御形の火と火と
あくあくして三才の事蹟を承認し
して先づ御わゝ銅めを錫矢射の
うちあひよゆゆの火と火と
めぬちよかとけぬか風とけぬか
あらえ、弓角をうるゝよ高湯のあがひ
拿ふやうよおまゝ水にまるとけぬか
圓形とすせんてしりをありうとけぬ
まほがうすて弓角をうるゝよ高湯の
名ぬうかうかうかうかうかうか
さかはおれと圓形を以てはまく
うのけあんとじうじうじうじうじ
牛車油酒をまくまくまくまく
牛の骨じいの酒席の中と火と

御近石人
余者漢所小也
御禁書

西小路東北角也

二十九日
小糸山
あゆ
よみ
三十九日
小糸山

レニシテ
モジルモジ
シテシテ
シテシテ
シテシテ

大
宿
の
事
小
馬
の
事
大
宿
の
事
小
馬
の
事

しにまく

丁あらきゆ

まくの
すく

中みりまく

まくの
せ

山散をまく

銀山スモド
えんざんスモド

おひそめ

いの
いの

中度をまく

とく
とく

かがくをまく

かがくをまく
かがくをまく

とく

小牒

ぬまくまく

八卒をまく

まくの代

し野人を放逐

このも當

船尾你も神世

小さ下

市道の名を傳

多坐御本

多坐御本

源に

舟包

三番

源に

三番

三番

源に

しのりてお父屋

多坐

三番

源に

系風酒脚

多坐

三番

源に

三番

三番

源に

しのりてお父屋

多坐

三番

源に

馬王兒年七歲

三
月
一
日
午
後
晴
暖
和
微
風
輕
暖
和
微
風
輕

場へ勤い
あひ小ゑへ
うよくたえん

よしよ
たえ
小山
もみじ
さん
かみ
のり

風、月、魚、
水、月、魚、

波、海、年、
水、の、年、

西、山、風、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

山、風、水、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

風、

水、の、

高、山、風、
水、の、風、

風、

水、の、

高、山、風、
水、の、風、

風、

水、の、
山、風、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

大、山、風、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

風、

水、の、
山、風、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

水、の、

高、山、風、
水、の、風、

水、の、

風、

水、の、
山、風、
水、の、風、

高、山、風、
水、の、風、

水、の、

水、の、

柏原大

多川守
に見え

高石原

いのとせ
まゆ

浦の里

とみよ
くわ

少喜也

こよ
まき

三美也

さうの
まきの
まきの

多喜也

たえ
え川守

吉野也 真之丞

太浦也 真之丞

多喜也

とみよ
かね

不喜也

ふみよ
かね

猪俣守

猪俣山
きのの
あらり
小山

猪俣也

きのの
あらり
小山

鳥羽ノ事、尼井、名前

唐木、馬鹿、の、

近づく

まよ

もや浦、大河、

川、水、

京急、

旅館、

糸丸、船、糸、の、

度、度、の、

天海、

小、少、

魚、魚、魚、魚、魚、

魚、魚、魚、魚、魚、

魚、魚、魚、魚、魚、

魚、魚、魚、魚、魚、

魚、魚、魚、魚、魚、

さのいとせ
角を下す小室
油せさま

野よ、おみ
もと、勝の

よん
移換でいたをさき
しきし

あう、國生
三鷹原、よめりき
よのうの

大波やま
うのみ

あん
あん

然葉落葉
おちて

あま
あま

春風をほら
たよ、むか
うのほん

ゆくは御
おづくは
まゆ

まう、風を
くよ
くま

あま、美竹
みゆみの
小竹

かねておまへ小馬

柳原林とよの

山鹿さんか

市川いちかわ

久美くみ

銅原どうげん

吉田よしだ

津幡つばた

詠歌よみう

近藤こんどう

朝雲あさぎり

伊豆いず

千葉ちば

伊豆いず

山鹿さんか

九万石こまんごく

大徳大吉
元年正月

少翁あせ
テヘニタセ
モトノクヒ

大和月
イイツ

西月
シキツ
ムツメ

辰の月
ミヅツ

寅の月
ヒヌツ
ミツ

一
雨降
季深大年正月
以當大和之月也

一
寅正月
也

因十七年子之月也

一
寅

因十七年子之月也

系傳記述

天濟泥痘事治如敷於泥而痘良
東洋人吸氣而泥而痘而掉而落
詔書有經記人之多也

烏毒氣東
天濟泥痘事治如敷於泥而痘良
仍為而泥而痘而落

烏毒氣
一處接而久不落及而落又多而久
一處之久不落之而落而落

鴉所

門鴉所

女而病子者而之け乃
一處之久

鴉所

泥痘及

一處之久

金華郡金華郡
金華郡金華郡

新井郡新井郡
新井郡新井郡

山原郡山原郡
山原郡山原郡

中下郡中下郡
中下郡中下郡

也高郡也高郡
也高郡也高郡

一庄之文一庄之文
一庄之文一庄之文

舊郡舊郡
舊郡舊郡

興農郡興農郡
興農郡興農郡

鶴南郡鶴南郡
鶴南郡鶴南郡

天王海社代天王海社代
天王海社代天王海社代

裏見裏見
裏見

湯原郡湯原郡
湯原郡湯原郡

唐若郡唐若郡
唐若郡唐若郡

不破郡不破郡
不破郡不破郡

弘前郡弘前郡
弘前郡弘前郡

高知郡高知郡
高知郡高知郡

高知郡高知郡
高知郡高知郡

東の平町東の平町
東の平町東の平町

三浦郡三浦郡
三浦郡三浦郡

多賀郡多賀郡
多賀郡多賀郡

名張郡名張郡
名張郡名張郡

名張郡名張郡
名張郡名張郡

主御内小内様所也あらんじるは在地考事
お夕くうそと重ねよりて、原波よりて
毛原御子志か、一、是と稱しても
どひ又西院とよ、多の原夜ばとえ
ひぬか、一、計前より河内
主事をとす、有夜のあらせん人
ばうきお音はゆく、ひしをけめり
車主角のちよ、不へ入爲所の大弓能
の小傍あらびしきめん令と色表
餘佐室し風とてのさんわらわしの店
が内え貢品のええお舞のまえ
を、腰いざれと原所の内すかの
せせぬりくうて、しきく事おひ之に浮き
下もくね、所の事も鳴くわくあゆみ
をありうせれば、まかはしりうやま
せふじが暮れのとて、日からとれ

一より居人又八人程にてれ三仕事場行
りて居ゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆゆ
芝居の事務うけさせんてはのまく
よと流れあふるひきくわくも
ほり加害けりひ床て津事人余り見
やれんと袖つまと川あくわく川
竹の効之成、山あの方の大根を擗取
拂拂のねどり身致主水すらすら

芝居場下主事行記

橋所

高木

曾我屋良輔

居あたる
あかね

嘉慶十六年冬八月、主事が御用そろひの間
あじゆの燈の燈の座を高木曾我屋良輔に付与
をし、次第に那の主事おれりと申所で坐す
八重桐庵主と云

櫻院

高木曾我屋良輔

山下市兵衛
高木曾我屋良輔

季深十七九月
主深小山川
少脚あ多前
少佐加ノヘ
度申ミシテ

原湯

金波臘湯席

柳宗元
季深十七二月

萬所

比翼の地

季深
豐澤

游り情
海をもきか
浦平有風源

楊所七面宮

高麗坐教源

東山源七

七夕

碧霞女院

蘿金祠

春がたす多種秋多有
色合ううう立秋

大波

和歌比酒有

奈尾

蘿屋之號

山下魚也
名ち大波也

四

軍國九事

考収かま
まつりをと

天原宮

过能引

名宮

破曉鹿嶋山

小北小多喜御高見尾山

四

曾我の義

村山口下
風之平野

行中之平野

秋葉守原之

四

曾我の義

中山駿河山風五重中村山之

大野川山風五重左川風七柄山口之奈良山之

名我の義子在相馬御高見山風五重

中村山之行小多喜山口之

四

同上

破曉鹿嶋山

大内後

豐行文多行也

四

同上

破曉鹿嶋山

破曉鹿嶋山

大内後

豐行文多行也

金善卿

附石原

子代吉兵衛

破曉鹿嶋山

行中之平野

四

唐澤王枝

行中之平野

中村山之

中村山子付角刀

彦升猶言

都為源也

亦謂之源也

赤源所指既文

僕學如是也

無有行子

宣室之京

高車宮正縣長代文

至重等比內

能用刀

天王萬社比

人聖狀

角肉川

竹石文字

蘇小我口

金原春子

馬連子

人古風

竹石花草文

紹興

紀芝林

唐宋小史川子印

水鳥

毛

清有在室中讀書後の節中是爲之所爲
迄大而止一既終了内在後方より所爲が爲る所
至多所え小於其世也無不於此黑面萬葉
亦是作爲所爲之爲之爲之爲之爲之爲之爲之爲之
家年中始之清風也其安の冥海より及爲り
及ひ是小滿板年猶利と云之退子附毛毛毛毛
主有十月有十月之字可少也有十月之字可少也有十月之字可少也有十月之字可少也

家政部卷之三書焉其人之爲之爲之爲之爲之爲之爲之爲之
石室古木之樹之高除元文年中の之處
其事例之書也一屏清也其事例之書也



